

禾生村

江戸期の四日市場、川茂、小形山、井倉、古川渡、田野倉の六か村が明治八年に合併して禾生村となった。南都留郡町村取調書によると、村名の由来については「城内良田多ク、禾黍能ク熟スルヲ以村名トス」と記されている。この由来のように、合併した村の真ん中を桂川が東北の方向に流れ、各所に水田が開け、周囲を山が囲むという地形的条件であった。

山梨県市郡村誌に記載されている田の面積は、桂村を除いて他の村々のどこよりも多い。また畑の面積も宝村に次いで多い。禾生村は田畑などの農業に依存することが大きかった地域といえる。土地の地味は必ずしも良いとはいえない。石や砂交じりの土が過半で、地質を善悪でみると悪が六分であると評価されている。ここで耕作している穀類のなかでは、やはり米麦が最も多い。また畑には芋・馬鈴薯、各種の野菜が栽培されているが、なかでも蘿蔔が多く、その他に桑や杉も栽培されていると記録されている。

地誌稿のなかで、禾生村の用水堰の項目の記事が目立っている。ここには五ヶ堰、大口堰、滝上堰、井倉堰の四堰が記載されている。このうち、滝上堰は谷村の十日市場で桂川から引水する家中川の流末で、四日市場や古川渡の田養水や飲料水になり、その水掛かり反別は六四町歩余である。五ヶ堰は小野、朝日川からの引水で田野倉の田養水と飲料水となっている。その水掛かりは三六町歩余である。大口堰は桂川左岸の川茂と小形山の地域の田養水や飲料水になっている。この水掛り反別は三一町歩余である。井倉堰は古川渡から小野川の水を引き井倉の田養水や飲料水としている。水掛かりは一町歩余である。これらの堰の用水の維持管理のために組合が作られたり、地域の人々の協議の場があったのである。

村民の生業は市郡村誌によると「全村農ヲ専ラトス」と記されているように、農業が主であるが、余暇兼業では九割近くが養蚕に従事している。その他では商が三五、工が一七、漁猟が一、銃猟が一と、兼業でも多くない。戸数は市郡村誌も地誌稿と同じ五一〇で、人口は三〇四〇（男一四五五、女一五八五）とある。他への寄留が一四四、他よりの寄留は一四六である。

明治八年にできた禾生村の中心は、古川渡に置かれた村役場にあったが、学校が三か所に設置されていたことから窺えるように、各地域の独自性が保持されていたといえる。谷村学校から分離独立したのは、一番初めが井倉の昇学校で、明治六年九月から民家を借用して開校している。次いで田野倉学校は明治八年九月に、尾県学校は同一〇年四月に開設している。

地誌稿には、村役所の掲示場が各学校の前に置かれていると記されている。この村は桂川などで川舟に依存して交通は容易でなかったが、明治初年では川茂橋や舟場橋などが桂川兩岸を、また境橋や落合橋、前橋、天神橋など六橋があつて、各集落を結び付けていた。

合併した禾生村にはそれぞれ村社があつたが、注目されるのは四日市場の生出神社である。近世初期の鳥居氏の創建と伝えられるように、旧下谷村の町々の氏神でもあり、郷社として格付けられていた。寺院も川茂の浄泉寺、田野倉の法福寺、あるいは保寿院（四日市場）などもあつた。

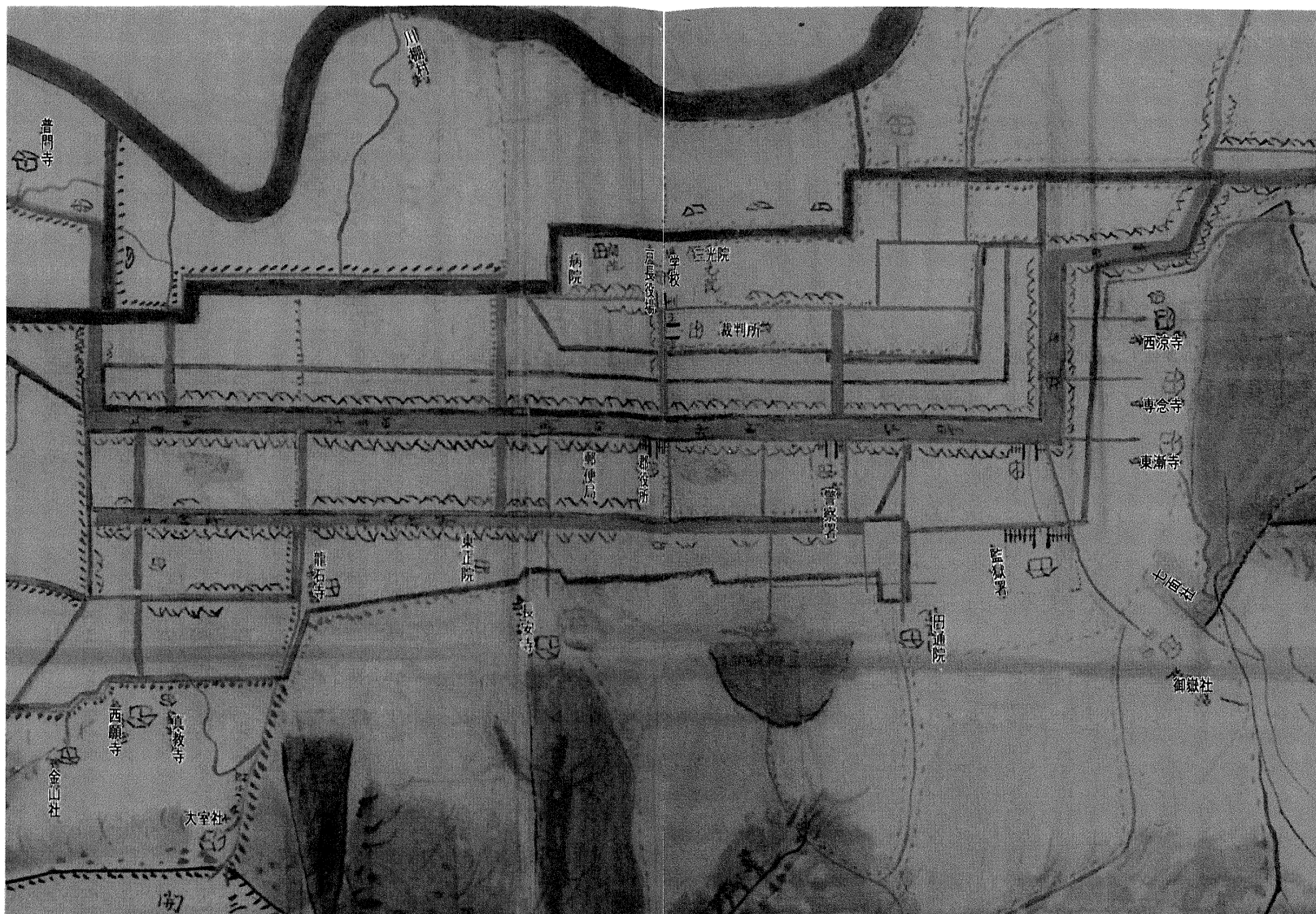


図1-2 谷村絵図のうち町並部分